

印刷から芸術へ

古書店主 山路 和広



遠近法を駆使し、庶民の間で親しまれた「眼鏡絵」(銅版手彩色・1780年頃)

私たちの日常生活において欠かすことのできない印刷文化は、五世紀中頃、ルネサンス運動の真只中のイタリア、金銀細工師のヨハン・グーテンベルクによる活版印刷の発明によって産声をあげた。

文芸復興(ルネサンス)運動により、領主たちの専制的な支配から逃れた新たな市民層が誕生し、知への欲求から書物の大量供給が待たれている状況の中、グーテンベルクの発明は画期的事件となった。それまで部の貴族や知識層のみに存在していた文字文化が一般市民の間に一気に広がり、新しい思想や価値観が芽生え、新たな印刷術は歴史を動かし近代化を推進していく大きな力となった。グーテンベルクの発明した金属活字は、鉛と錫とアンチモンの合金で、低温で溶解するため比較的容易に製造でき、砂でなく真鍮の鑄型を使うことで精密度の高い活字を作ることができたのである。

〈歴史に埋もれた世界初の銅活字〉

一般的にはあまり知られていないが、グーテンベルクの発明に先立つこと二世紀以上も前に朝鮮半島で銅による活字印刷が行われていた。

高麗時代の一二三四年頃、消失されてしまった為に実物は確認されていないが、五十巻にもおよぶ『古今詳定例文』が銅活字版によって印刷されたという記録が残されており、これが事実上世界史上初の金属活字となる。さらに三三九二年頃に制作された『高麗史』の記述によっても、朝鮮半島にて銅活字が頻繁に使用されていたことが明らかになっている。高麗青磁などの様々な文化が栄えた高麗時代(九三六〜三九二年)、中国で開発された陶板や木製の活字を改良するかたちで独自の印刷文化も飛躍的な革新を遂げていたようだ。



銅活字板(高麗大学博物館蔵)



銅活字によって印刷された『十七史纂古今通要』(1403年・韓国国立中央博物館蔵)

世界に先駆け朝鮮半島で芽生えた金属活字だが、残念なことにその後の政情変化により李氏朝鮮(三九二〜一九〇)が始まって以来停滞し、東洋で芽生えた新しい印刷文化はヨーロッパに大きく遅れをとってしまうこととなった。さらに三三九二年の千辰の乱においても、豊臣秀吉の日本軍による活字や印刷器具の略奪により朝鮮の印刷文化は徹底的な打撃を受け、復活の兆しを見せるまで長い年月を要した。一方この機を境に日本においては活字印刷技術が飛躍的に進歩をとげることとなったと言われている。

〈印刷から芸術へ〉

グーテンベルクが活版印刷を発明した頃、挿絵

印刷においてそれまでの木版画にとってかわり主流となったのが銅版画である。

銅版画には直接銅板に工具を使って銅版を彫る技法(直接法)と、腐蝕液を使って間接的に彫る技法(間接法)の2種類がある。

直接法

・エングレーヴィング

最初に発明された技法。銅板にビュランという彫刻刀のような工具を使って凹線を彫り、インクを詰めて印刷する方法。

・メゾチント

銅板に細かい凹線を彫刻し、表面をスクレイパーで平らに削ることで、黒から白へのグラデーションを作る方法。より複雑かつ繊細な表現をすることができると。

・ドライポイント

ニードルという尖った針棒を使用し、銅板を直接傷つけ描いていく方法。線の周囲のケバ立ちを利用



18世紀ヨーロッパの愛書家たちの間で流行した銅版画による蔵書票



銅版画の原版



「デューラーによる銅版画」

したにじみができる。

間接法

・エッチング

磨き上げた銅板を蜜蝋などの防蝕液で覆い、針で描画の後、硝酸等で腐食させ、プレス機を使用する凹版印刷で、大量印刷に適している。木版画では表現不可能な細密な線が得られ、盛り上がったインクにより美しい線画となる。

・アクアチント

防蝕剤として松ヤニ粉末を使用する。これまでの線による表現とはまったく違った、面の描画ができる画期的な手法。

最初に銅版の技法を発明したのはドイツ南部アウクスブルグで甲冑の彫刻をしていた鍛冶職人であると言われ、初期の銅版画家たちのほとんどは金細工師か印章・鋳型製作者、貨幣彫金家、ガラス絵画師家、木彫家などの職人たちであった。なかでも最初に、銅版画を絵画と並ぶ芸術ジャンルへと高めた人物がニルンベルク生まれのアルブレヒト・デューラー(四七―一五二八)である。

金細工師の父を持つデューラーは、その助手として金細工技術を習得するかわら、幼い頃からデッサンの学習を受け、画家のアトリエを廻りながら修行を積んだ。初期に優れた木版画を多く残しているデューラーは、一四九五年頃から銅版画(エングレーヴィング)を手がけるようになり、この技法によって大作「受難」や「三天銅版画」と呼ばれる「騎士と死と悪魔」、「屋内のヒエロニスム」、「メランコリア」ら代表作を完成させた。

一六世紀には図版の多くが銅版画によって印刷され、なかでもジェラルド・メル

トカーレの『世界地図帳』に代表されるように、高価な地勢図・地図にこの方法が用いられ、その後も、油絵の複製に適したメゾチントや、本の挿絵に用いられたアクアチントなど新しい技法が発明されるなど、銅版画は芸術界、印刷界ともに華々しい発展を遂げた。

しかし一九世紀はじめに、より手軽に印刷可能な石版画(リトグラフ)が発明され、ついに銅版画は印刷における役目を終えることになった。様々な技法を生みだしてきた銅版画は、それ以来現在に至るまで芸術の分野で発展し続けることになるのである。

参考資料

『韓国古印刷史』韓国図書館学研究会編
『PRINTING CULTURE』(ミズノプリンティングミュージアム編)

協力 安土堂書店



古書店主
山路 和広
やまじ かずひろ

大手ベンチャー企業勤務、放浪の旅を経て、2003年東京・渋谷に古書店/カフェ「Flying Books」(フライング・ブックス)をオープン。国内外でCDの出版・流通を展開する音楽レーベル「FLY N' SPIN RECORDS」の代表、カルチャースクール講師なども勤め、古書のコーディネート、イベント制作を軸に新刊書店、レコード店、インテリア・ショップ、アパレル、出版社等と既存の枠に捉われないコラボレーションを展開している。
著書に「フライング・ブックス 本とことばと音楽の交差点」(晶文社)。
<http://www.flying-books.com>